



世界におけるナイトライフ研究の動向と日本における研究の発展可能性

著者	池田 真利子
雑誌名	地理空間
巻	10
号	2
ページ	67-84
発行年	2017
URL	http://hdl.handle.net/2241/00151423

世界におけるナイトライフ研究の動向と日本における研究の発展可能性

池田真利子

日本学術振興会特別研究員PD, 東京学芸大学

東京五輪開催（2020）に始まる都市観光活性化の動きのなか、ナイトライフ観光への注目が高まりつつある。本研究は、プレ五輪、ポスト五輪における東京の夜間経済や夜間観光の発展可能性を視野に、世界のナイトライフ研究・ナイトライフ観光研究の動向とその具体性に関して展望を行った。その結果、同研究は2010年代以降増加しつつあるが、アジア圏と欧米圏とでナイトライフの語義が異なり、前者はより広義であるのに対し、後者ではナイトクラブやバーといった特定の観光資源を意味する点、また飲酒やパーティ等の観光行動と結び付くため若者集団に特徴的な観光形態として広く認知されている点、観光地域により観光形態は個人・ツアー観光など多様である点等が明らかとなった。プレ五輪における風営法改正や、ポスト五輪のMICE観光振興・IR推進法成立の背景には観光を巡る都市間競争の熾烈化も窺え、東京のナイトライフ観光は今後より一層変化を遂げる可能性がある。

キーワード：ナイトライフ、観光、ナイトクラブ、欧州

I はじめに

目下、日本の首都である大都市東京は、2020年開催予定の東京オリンピックに向けて大きな変化を遂げようとしている。この来るオリンピックへ向けた動きのなかで、日本の学会もそれに呼応する形で一層の研究が進められつつあり、地理学においても、この東京オリンピックに向けた一層の都市変化を捉えようとする動きがある（大城・荒又、2017）。これに対して、政治政策分野との協働、ないしそこへの提言を積極的に行う社会学等の学術分野において重点的争点となってきたのは、1964年の東京オリンピックとの差異化である。当時の五輪では、戦後レジームにおける東京のインフラ整備と構造的改革、すなわちハード面の整備が意図されたのに対し、2020年の東京オリンピックでは、ポスト・オリンピックにおける東京の強みを世界に発信するため、ソフト面の整備が意図されるべきとの考えである（吉見、2015、2016）。これは、東京文化資源区の設置（2015）、あるいは東京ビエンナーレの誘致計

画（2020）などに代表されるように、スポーツの祭典と同時期に文化の祭典を東京で開催しようとする目論見である。

こうした一連の試みは、東京北東部という地域を核とする文化の世界的発信として意図されている。吉見（2016）によると、東京オリンピック（1964）では米軍基地の所在した代々木国立競技場など、戦後米軍が接収した土地のスポーツ・レジャー施設への転用を背景として東京西南部における文化的利用が活発化したが、東京オリンピック（2020）では、文京区・千代田区、台東区といった東京北東部における文化中心性の再興を意図しているのだという。例えば、先述の東京文化資源区は、秋葉原駅を核とした半径2km圏内の地域振興圏を設定されている。

こうしたオリンピックへと向かう東京の変化の兆しとして、重要な動きがもう一つある。それが夜間（ナイトタイム）における夜間経済（ナイトエコノミー）や夜間文化（ナイトカルチャー）への注目の高まりである。例えば、Time Out Tokyo¹⁾による「ナイトエンターテインメントと考

えるこれからの街づくり」(2016年5月17日)と題した討論会の開催,あるいは夜間経済の一例でもあるナイトクラブ等を中心とした「風俗営業等の規制及び業務の適正化に関する法律(以下,風営法)」改正への一連の動きなどは,これらに関係する流れとして理解されよう。

こうした夜間経済への動きは,来る東京オリンピック(2020)前後の社会経済的变化と不可分の関係にあると考えられる。東京オリンピック前をプレ・オリンピック,東京オリンピックの後をポスト・オリンピックとし,以下それぞれで起こり得る状況をみていく。

まず,前者の例として,2012年にロンドンで開催されたロンドンオリンピックとその後の変化に注目したい。ロンドン地下鉄は,2016年8月より週末(金曜・土曜)のみの夜間地下鉄The Night Tubeの運航を開始した。この背景には,2000年代以降の週末夜間営業への需要増加があったという(Transport for London)。夜間地下鉄の就航は,ラグビーワールドカップの主催と偶然に一致したとされており(ロンドン交通局,2014),オリンピックや他のメガ・イベントとの直接的な因果関係は不明である。しかし,EU域内の週末観光の増加を背景として,ロンドン市が

メガ・イベントの開催前後に夜間観光を意識した政策を開始したのは必然的であり,大都市が24時間経済を指向することの現れであろう(Crary, 2013)(図1)。現在,都市部の地下鉄24時間運航を行っているのはニューヨーク,シカゴ,ストックホルム,ベルリン,コペンハーゲン,ロンドンであり,そのほかに東京やパリが運航を検討中である(Volterra, 2014)(表1)。

こうした世界の都市における夜間経済への流れ



図1 ヨーロッパのナイトライフ観光
週末の鉄道・地下鉄・バス24時間運航を2003年より開始したベルリン(フリードリヒスハイネ＝クロイツベルク地区)の日曜早朝1時頃(土曜深夜)の様子。深夜にも関わらず大勢の人で賑わっていることがわかる。
(2014年10月撮影)

表1 世界の都市における鉄道・地下鉄・バスの運行状況

都市名	開始年	平日		週末(金・土)	
		通常運行時間	夜間運行種類(路線数)	通常運行時間	夜間運行種類(路線数)
ニューヨーク	不明	24時間	全路線	24時間	全路線
シカゴ	不明	24時間	地下鉄(2線)	24時間	地下鉄(2線)
ストックホルム	不明	5:00～00:30	深夜バスのみ	24時間	全路線
ベルリン	2003	4:00～1:00	深夜バスのみ	24時間	全路線
コペンハーゲン	2009/2002 ^{注)}	24時間	地下鉄(全路線)	24時間	地下鉄(全路線)
ロンドン	2016	5:00～1:00	深夜バスのみ	24時間	地下鉄(5線)

コペンハーゲンの場合,週末の24時間運行は2002年,平日の24時間運行は2009年に開始した。

のなかで、東京都は2017年初頭に、「旅行者誘致を巡る都市間競争が激しさを増す中、新たな視点に立」ち、「ナイトライフ観光の推進」が必要であること、また、「東京での夜間の時間帯の観光」および「都内のナイトライフのモデルルート」作成や海外への情報発信」の必要性や、その可能性を提示している（東京都、2017）。こうした背景には、ポスト・オリンピックの文脈、すなわち2016年12月26日に公布された、「特定複合観光施設区域の整備の推進に関する法律（以下、IR推進法）」の成立や、それと同時に東京圏の統合型リゾート建設の候補地となっている港区台場、横浜市、千葉県幕張などの湾岸エリア部の開発意識も窺える。

なお、上述の文脈におけるナイトライフに関する研究の重要性は徐々に高まりつつあるものの、従前の研究においてナイトライフを扱ったものは管見の限り非常に数が限られている（後述）。また、社会的提言を行う社会学等の学術領域においては、研究対象としていまだ取り上げられてはならず、研究対象に資すると考えられる。

そこで本稿は、国内外のナイトライフおよびナイトライフ観光に関する既存研究の展望を行い、世界におけるナイトライフ研究の動向とナイトライフ観光の具体性を明らかにすることで、現在変容の最中にある東京のナイトライフ観光研究の議論構築のための一助と成すことを目的とする。地理学はこれまで、将来的予測や提言から距離を置いてきた。しかしながら、来るべき近い将来を予測し、新たな研究の地平を開拓することも重要だと考え、本稿では従来の研究における位置付けとその発展可能性を含め広く議論を構築したい。

本稿における研究の手順は以下の通りである。まず、世界におけるナイトライフ研究の動向を総括し、ナイトライフ研究およびナイトライフ観光研究それぞれの文献レビューを行う（Ⅱ）。続い

てナイトライフ観光資源の具体性と観光客の年齢層の特徴、およびナイトライフ観光の地理的特徴と観光行動に関して文献レビューを踏まえつつ、その実態把握に努める（Ⅲの1）。そして、日本におけるナイトライフ研究の文献レビューを中心に、東京オリンピックというメガ・イベント後の国家規模の観光事業展開を視野に、日本のナイトライフおよびナイトライフ観光と研究の発展可能性について触れる（Ⅲの2）。最後に、ⅡとⅢを踏まえ、ナイトライフ観光の今後の研究発展の可能性に関して若干の考察を加えたい（Ⅳ）。

Ⅱ ナイトライフ研究の動向

1. 研究方法とナイトライフの定義

本稿でレビューとして取り上げる文献の選択基準は以下の通りである。論文検索用データベースであるScopus²⁾を用いて、ナイトライフ（Night life, Night-life, Nightlife）を論文タイトル、抄録、キーワードのいずれかに含む論文を網羅的に把握した³⁾。同論文数の推移をみると、1990年代にはおおよそ0~2本程度を推移していたのに対し、2008年より増加に転じ、2010年代に研究蓄積が著しい（図2）。また、学術ジャーナル別の研究数推移をみると、中毒依存症やドラッグポリシーなど、健康科学研究が2000年代後半に増え、同時に都市研究に関する研究も2000年代以降少しずつ増加してきた。論文数の国別内訳をみると、アメリカ（92本）、イギリス（75本）、スペイン（46本）、オランダ（29本）、デンマーク（23本）、イタリア（14本）の順に並ぶ。すなわち、地域別でみると、ヨーロッパにおいて関心もたれている研究対象であるといえる。地理学ないしは地理に関する研究は118件と全体の3割程度を占めており、決して少なくはない。

なお、これら研究の主眼を、Scopusにおけるキーワード検索数から類推すると、政策（209件）

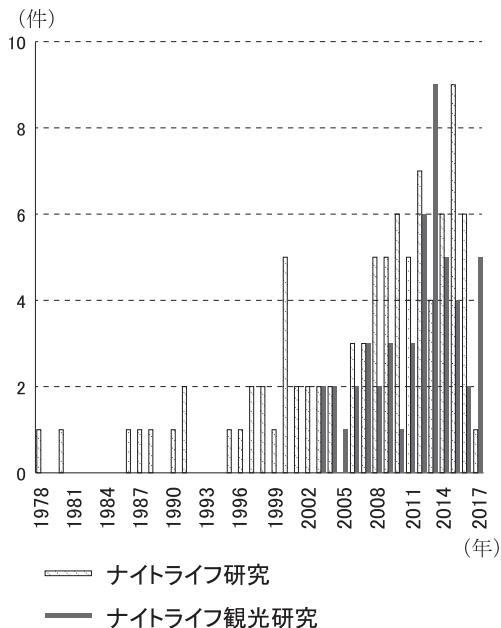


図2 ナイトライフ研究の推移（1978～2017年）
 （Scopusにより作成，最終閲覧日2017年7月21日）

に係る研究が最多であり，アルコール（207件），ドラッグ（191件），薬物（136件）に関するもの，クラブ（167件）やレジャー（138件），バー（133件），音楽（108件）といった特定の施設業種や観光行動に関するものが順に並ぶ。他には女性（131件）やエンターテインメント（85件），ビジネス（83件）に関する研究等がある。

これら研究のうち，ナイトライフ観光Nightlife Tourismをキーワードとした論文数は50本とナイトライフ研究の10%程度を占め⁴⁾，特に2012年以降に顕著な増加をみせている。そこで本稿では，より広義のナイトライフ全般に関する研究をナイトライフ研究，また，それよりも狭義の夜間の観光を意味するナイトライフ観光に関する研究をナイトライフ観光研究と定義し，以下ではそれぞれの先行研究を展望する。なお，日本語の「盛り場」という表現は，実質的に日本のナイトライフに相当する語であるが，この片仮名表記の「ナ

イトライフ」と「盛り場」の違いに関して問題提起を行うことも本稿の意図するところであるため，本稿でのナイトライフに「盛り場」の先行研究は含まないこととする（後述）。

2. ナイトライフ研究の動向

ナイトライフ研究で最初のもは，イギリス北東部のタインサイドTynesideを取り上げたRobinson（1988）である。これは，かつて鉄鋼業と造船業の街であったタインサイドが，1980年代にナイトライフとショッピングモール等が中心のサービス産業主体の都市，すなわちポスト工業都市へと変容していく様子を描いた学術書籍である。また，Bianchini（1995）は，夜間経済Night-time Economyという用語を論文標題に用いて，文化政策と都市のナイトライフの関係性を簡潔にまとめている。同著者は，創造都市の概念を創出した研究者としても著名な人物であるが，1970～1980年代の欧州都市，とりわけデンマークやスウェーデン，オランダ，ドイツ，フランス，イタリア諸都市のナイトライフを活性化するための文化政策が現象として既に存在していた点に触れており，またその要因を，ポスト1968の文脈，すなわち新しい都市社会運動の流れと同時代における失業率の高さ，およびそれに起因するレジャー・余暇時間の余剰を要因として挙げている（Bianchini, 1995）。これら初期の研究では，脱工業化社会という用語こそ用いられていないものの，それらと大きく関わる研究視点を提示したものが多。

こうした研究の潮流を組み，地理学においてもナイトライフ研究が2000年代後半以降増加し，同内容に関する特集号が発表されるなど，2010年代以降ナイトライフ研究は注目を浴びつつある。例えば，SAGE社の発刊する学術誌Urban Studiesの52巻3号では，「都市の夜間に関する地

理 *Geographies of the urban night*」(2015) が特集号として発表された。同特集号の著者は、オランダ、ユトレヒト大学人文地理学分野の van Liempt らであり、その代表論文である van Liempt et al. (2015) では、地理学における夜間研究の発展可能性に関する詳細なレビューと研究発展可能性がまとめられた。同著者によると、日常の地理は本来的に日中の活動を想定しており、夜間に関しては、その夜間経済活動に関するものを含み、ほぼ無視されてきたが、シアトルで開催された AAG での「都市の夜間に関するセッション」開催 (2011) 以降、地理学、とりわけ都市に関する夜間に関して注目が増しつつあるという (van Liempt et al. 2015)。同論文によると、都市の夜間に関する研究 (ナイトライフ研究) は、①都市の夜間経済の世界的普及に関する研究、②夜間経済の過熱を抑制するための規制増加に関する研究、③グローバル・ノースにおける消費およびエンターテインメントの新形態の成長に関する研究の 3 つに大きく分類できるという (van Liempt et al. 2015)。ただし、同特集号では、ナイトライフ観光に関するものは Chatterton and Hollands (2003) の 1 件のみの紹介に留まり、ナイトライフ観光の研究動向は紹介されていない。そこで次項では、ナイトライフ観光に関する既存研究を精査する。

3. ナイトライフ観光研究の動向

Scopus によると、ナイトライフ観光に関する論文が最初に発表されたのは、1990年代の東南アジアであった。Cabasset (1991) は、1990年代のマスツーリズムを経験したインドネシア、バリ島の観光変容を取り上げている。この論文では、かつてヒッチハイカーの休憩所として知名度の高かったクタが、国際的チェーンホテル群やナイトライフ観光資源が立ち並ぶ海岸リゾート地として変容した様相を取り上げたものである。同論文はフラ

ンス人研究者により発表された研究であるが、ここで用いられている「ナイトライフ」は、欧米的観光資源・形態・開発と結びつけられていることが読み取れる。こうした語法や語彙のニュアンスの違いを明確化するため、以下ではアジア圏と欧米圏のナイトライフ観光に分類し整理する。

1) アジア圏のナイトライフ観光

まずアジア諸国のナイトライフ観光は、夜間観光 *Nighttime Tourism* とナイトライフ観光 *Nightlife Tourism* へと分類できる点が特徴的である。前者では夜間という時間帯に重点が置かれており、夜間の観光形態を広く扱う一方で、後者はより欧米人に需要の高い観光行動やライフスタイルと関わる観光形態である。

まず前者を扱った論文としては、台湾の市場文化を巡る観光体験を扱った Kuo et al. (2012) がある。これは、アジア特有の市場文化に根差す外食文化が、海外からの観光客により主要観光資源として評価されている点に注目している (Kong and Sinha, 2015)。また、北京における中国国内旅行者の観光行動特性において、夜市や飲み屋街、夜景等の観光資源を楽しむ夜間観光が最重要資源であることを中国国内観光客への 150 件のアンケート調査により明らかにした Yin (2011) にも、同様の傾向が看取できる。

他方、食文化とは異なり、本稿の「ナイトライフ観光」と定義を大まかに一にする後者のナイトライフ観光研究は、東南アジアを調査フィールドとする研究に散見される。例えば、シンガポールの夜間経済を対象とした Yeo et al. (2012) は、同産業が雇用機会の創出といった点から市経済にとって重要な意味をもつと述べた上で、フォーマル、インフォーマル双方の夜間経済が重要な意味をもつことを指摘している (Yeo et al. 2012)。さらにインドネシアの首都特別州であるジャカルタ

を扱ったTadié and Permanadeli (2015) は、ナイトライフ観光資源が様々な時限における政治的アジェンダを反映し、インフォーマルな都市形成に寄与した点を明らかにしている。また、観光滞在におけるタイのイメージをタイ住民と国際観光客双方で調査し比較した結果、文化的観光資源、現地の人の親しみやすさ、食べ物が両者にとって重要な観光イメージであったのに対し、ナイトライフとエンターテインメントは国際観光客にのみ、重要なタイの観光イメージとして重要視されていたことを明らかにしたHenkel et. al. (2006) がある。こうした欧米観光客を想定して開発されたナイトライフ観光資源は、特定の地域経済に一定の影響を与えており、例えばインドネシアのバリ島では、現地女性起業家の経済的自立を可能とした点も指摘されている (Tajeddini et. al. 2017)。

このナイトライフ研究は、近年、東南アジアのみならず、東アジアにおいても徐々に増加しつつある。例えばカジノゲームで知名度を有する中国特別行政区マカオにイベント観光⁵⁾を目的に来る観光客の余暇・観光行動特性をイベント観光客への調査より明らかにしたWong (2011) によれば、彼らにとって食事や地理的接近性こそ重要視されており、ナイトライフエンターテインメントやカジノ・ギャンブルは重要視されていなかった。しかし、同一著者を含む近年の研究成果によると、中国の反腐敗キャンペーン以降、それまでマカオのゲームギャンブルに高額の経済支出を行っていた中国本土からの高所得の観光客を意味するVIP観光客がその経済支出を減らしたことで、他方では中国本土からの観光客のマカオの観光イメージは依然としてギャンブルと強く結びつけられていること、また、ナイトライフ観光の評価は個人観光客を中心に評価されていることを指摘している (Li et. al. 2017)。こうしたマカオの観光資源は、中国本土や香港人、台湾人、欧米圏からの観光客

によっても異なる評価がなされる傾向にあるが (Park et. al. 2015)、2010年代以降のマカオ観光を取り巻く社会的変化のなかで、観光形態の変化に従い観光資源の評価は多様化しつつあることがわかる。

こうしたことから、これまで東南アジア諸国の主要都市部では、植民地期における港湾都市としての歴史的背景やポスト植民地時代における観光への資本依存を背景に、欧米的なナイトライフ観光資源の重要性が増加してきた。しかし2010年代以降は東アジア都市部も変化に直面しつつあることがわかる。また、その理由は目下目まぐるしく変化する大都市のハブ空港建設やMICE観光振興⁶⁾、IRの建設計画⁷⁾等のアジア域内の都市間競争の激化に求められるであろう。これらに付随する観光資源として、今後ナイトライフ観光の需要はアジア圏において高まると予想される。

2) 欧米圏のナイトライフ観光

他方、欧米圏のナイトライフ観光は、特定の施設を来訪する観光行動としての側面が強い (後述)。欧米圏の先行研究ではむしろ、これら観光資源をどのように評価、ないしは制限するのかという側面から研究が培われてきた。前者の例として、ナイトライフアメニティを評価する研究 (Esteban-Talaya et. al. 2012)、観光資源としての重要性と政策に注目した研究 (Hayir-Kanat, 2016; Litvin and Wofford, 2017)、それらをホスト社会の住民側がどのように受け入れているのかを明らかにした研究 (Serra-Cantalops and Ramon-Cardona, 2017)、また観光における肯定的イメージや観光戦略およびデスティネーション・マーケティングとしての重要性を指摘した研究 (Dwivedi et. al. 2009; Henkel et. al. 2006; Joksimovic et. al. 2014; Kamenidou et. al. 2013; Prayag, 2007; Rawding, 2000) がある。これらと関係するものとして、ハ

リケーン被災地の被災後のイメージ回復にナイトライフ観光資源が重要な意味をもたらしたことを明らかにした研究もある (Ryu et. al. 2013)。他には、ナイトライフ観光の身体性を明らかにした Hubbard (2013) も挙げられよう。これら研究のなかには、ナイトライフ観光資源を他都市と差異化する資源として重要視する研究視点も含まれている。これと関連し観光学分野では、既にナイトライフ観光資源が調査項目として定着しつつあるという点にも触れておく。

他方で、後者の例として、「夜間の規制」に関する研究視点にも代表されるように (van Liempt et. al. 2015), ナイトライフ観光資源の否定的側面も多く取り上げられてきた点も看過できない。例えば、アルコール (Hesse et. al. 2012; Tutenges et. al. 2012), アルコール問題とパブクロール (Tutenges 2015), アルコールとタバコ, ドラッグ (Bellis et. al. 2007), ドラッグ (物質) 使用 (Bellis et. al. 2000, 2003, 2009; Bellis and Hughes, 2003), またこれら問題におけるガイドの責任 (Tutenges, 2013), リゾート地の若者による買春を含む性行動の実態と危険性 (Bellis et. al. 2004, Hesse and Tutenges, 2011), 性的ハラスメントの危険性 (Calafat et. al. 2013a), またそれらと社会階層の関係性 (Kelly et. al. 2014), ドラッグと買春行動を含む性的行動, 健康 (Tutenges, 2012), ドラッグと暴力 (Calafat et. al. 2013b, Fjær and Tutenges, 2017), 暴力 (Hughes et. al. 2008), 暴力と健康 (Tutenges, 2009) 健康と安全性 (Sönmez et. al. 2013), セックス・ツーリズム (Hobbs et. al. 2011), ゴミ問題 (Becherucci and Seco Pon, 2014), その他にはアルコール・ドラッグツーリズム (Cherpitel et. al. 2015) がある。これら研究は、夜間における観光特性が飲酒類と関係すること, またこれら観光行動が10代を含む若者と関わることから、欧米圏のナイトライフ観光の一例

面における社会的課題の存在を示唆する。他方では、上記研究の著者間の重複からも明らかのように、特定の研究テーマ・領域による成果である側面も併せて述べておく必要がある。

興味深い点は、欧米のなかでもとりわけヨーロッパにおいて、ナイトライフ観光が社会的に共通の課題となるほど、明確に観光形態として自明視されている点である。裏返せば、ナイトライフ観光が観光の一形態として一般性をもつということである。ただし、ナイトライフ観光は、出身国・地域の属性だけではなく、若者集団など特定の年齢集団や社会属性とも大きく関わる。例えばアメリカでは、Y世代⁸⁾と称される第一次ベビーブームのジュニア世代の健康・ウェルネスツーリズムにおける観光の動機付けにおいて、女性はナイトライフ観光資源を高く評価するなど (Hritz et. al. 2014), Y世代という年齢・世代別の社会集団や、そのほかの社会的属性からみた観光資源評価という研究視点も今後求められよう。

それでは、欧米諸国の観光全体に占めるナイトライフ観光資源の評価はどうであろうか。観光産業におけるナイトライフ観光資源への評価は、観光客の出身地域により異なる傾向があることが報告されている (Lin et. al. 2015)。同論文はイギリスへの中国人団体ツアー客の観光行動における観光アトラクションの評価を、現地ツアーオペレーターとの協働により回収したデータを基に共分散構造分析を用いて明らかにした結果、中国人ツアー客は、遺跡や自然景観、顧客サービスに対して高い評価をしたのに対し、買い物行動や宿泊施設、エンターテイメント・ナイトライフ観光資源に関して低い評価をしたことを明らかにした。この研究は、II章の3.の1)で触れたような2010年代以降のマカオにおける観光形態や観光資源評価における変化と同様に、中国におけるアウトバウンド観光市場の成熟過程としても理解できる。

すなわち、インバウンド・アウトバウンド観光⁹⁾双方の観光市場において成熟した国・地域・都市では、夜間観光の発展もみられる可能性があるということである。一般的に、ナイトライフ観光資源の利用客は、ツアー観光客より個人観光客の傾向が強い (McCartney, 2008) という特徴からも明らかのように、インバウンド・アウトバウンド双方の観光形態の成長段階と対比することが可能であろう。

Ⅲ 世界のナイトライフ観光の具体性と東京のナイトライフ観光の可能性

1. ナイトライフ観光の具体性と特徴

1) ナイトライフ観光の具体性と観光客の年齢層の特徴

既存研究においてナイトライフ観光が意味する具体的な観光資源を種別でみると、飲酒観光・レジャー行動 (25件) が最多である。この飲酒は、例えば音楽とともに客がダンスをするナイトクラブ (17件) や、バー (14件)、音楽 (8件) が主たる観光アトラクションとして機能している。すなわち、これら観光行動は、主として酒類を提供する観光アトラクションへの夜間レジャー行動として括れる。その他には、エンターテイメント (10件) やカジノ (4件)、ゲームイベントといった観光アトラクションが具体例として挙げられる。これらは夜間資源の特性としても理解できる。

こうした観光アトラクションを訪問する観光客の年齢層をみると、概ね若年層を想定した既存研究が多い。それらの年齢層は、若い成人 Young Adults などの表現 (Sönmez et. al. 2013) に代表されるように、10代や20代に限定せず、例えば 16～35歳 (Calafat et. al. 2013b, Hughes et. al. 2008, Kelly et. al. 2014) や 18～29歳 (Hallab et. al. 2006)、15～24歳および 25～44歳の2階層比較 (Bellis et. al. 2009) がある。あるいは調査結

果として、例えば 16～25歳 (Hesse et. al. 2012) や 18～26歳の若者観光客 (Sönmez et. al. 2013)、16～34歳 (Hesse and Tutenges, 2011)、16～30歳 (Tutenges and Hesse, 2008)、18～35歳 (Bellis et. al. 2007)、16～35歳 (Bellis et. al. 2003) など、10代から40代までの間を幅広く想定している。

また、これら実証的研究とは別に、理論的枠組みに関する研究や比較研究においては、具体的な年齢層は定義されておらず、若者や若年層を意味する表現 (young tourist, young adults, young partygoers等) を用いており (Tutenges, 2009; 2013)、これらのなかには、例えば「学校」に通う年齢層を想定しているもの (Fjær and Tutenges, 2017) から30代を含むものまで様々である。

以上より、ナイトライフ観光を扱った既存研究の多くは、ナイトクラブやそれに類する観光アメニティなどを観光資源とする観光行動であること、また、こうした観光行動は概ね10代半ばから40代までの若年・青年層に特徴的な観光行動であることが明らかとなった。

2) ナイトライフ観光の発現地域にみる地理的特徴と観光行動の特徴

それでは、ナイトクラブを主たる観光資源とするナイトライフ観光の地理的特徴、あるいは観光行動はどういったものであろうか。前節と同様に先行研究で取り上げられている研究地域を俯瞰すると、ヨーロッパ地中海・島嶼部と北米・オセアニアの観光都市、および東南アジアという3つの大まかな地域的特徴が浮かび上がる。このなかで先行研究の対象としてはヨーロッパが最多である。また、ヨーロッパ内部においても、ナイトライフ観光の発現地域には、西ヨーロッパの都市部や地中海島嶼部・リゾート地、東ヨーロッパのリゾート地と多様性がある¹⁰⁾。

先行研究で挙げられている都市を列挙すると、

オランダのアムステルダム (Rawding, 2000) やスイス (Hallab et. al. 2006), イギリス (Hubbard, 2013), スペインのカスティーララマンチャ州 (Esteban-Talaya et. al. 2012), またヨーロッパ島嶼部の例としてスペインのイビサ島 (Bellis et. al. 2000; 2003; 2009, Bellis and Hughes, 2003; Hughes et. al. 2008, Kelly et. al. 2014, Serra-Cantallops and Ramon-Cardona, 2017), 同じくスペインのマヨルカ島 (Bellis et. al. 2009; Hughes et. al. 2008), 地中海沿岸リゾート (クレタ・キプロス・イタリア・ポルトガル・スペイン) (Calafat et. al. 2013a; 2013b, Sönmez et. al. 2013), また, トルコのイスタンブール (Hayir-Kanat, 2016) も挙げられる。また, 東欧リゾート地として, ブルガリアのサンビエーチ (Hesse and Tutenges, 2011; Hesse et. al.

2012; Tutenges, 2009, 2012, 2013, 2015; Tutenges and Hesse, 2008; Tutenges et. al. 2012) やセルビアのベオグラード (Joksimović et. al. 2014) がこれらナイトライフ観光を扱った事例として挙げられている。

これらヨーロッパのナイトライフ観光の発現地域の時系列的变化をみると, 初期の研究では西ヨーロッパ都市部に関する研究が主体であったのに対し, その後は地中海島嶼部のリゾート地, あるいは東ヨーロッパのリゾート地へと, 時間の経過とともにナイトライフ観光の発現地域が地理的に拡大している様相がわかる (図3)。

なお, 観光行動の特徴としてみると, 西ヨーロッパ都市部のナイトライフ観光資源は, より個人客による観光行動に支えられているのに対し (Presdee, 2002), 例えばイギリスの地方大学

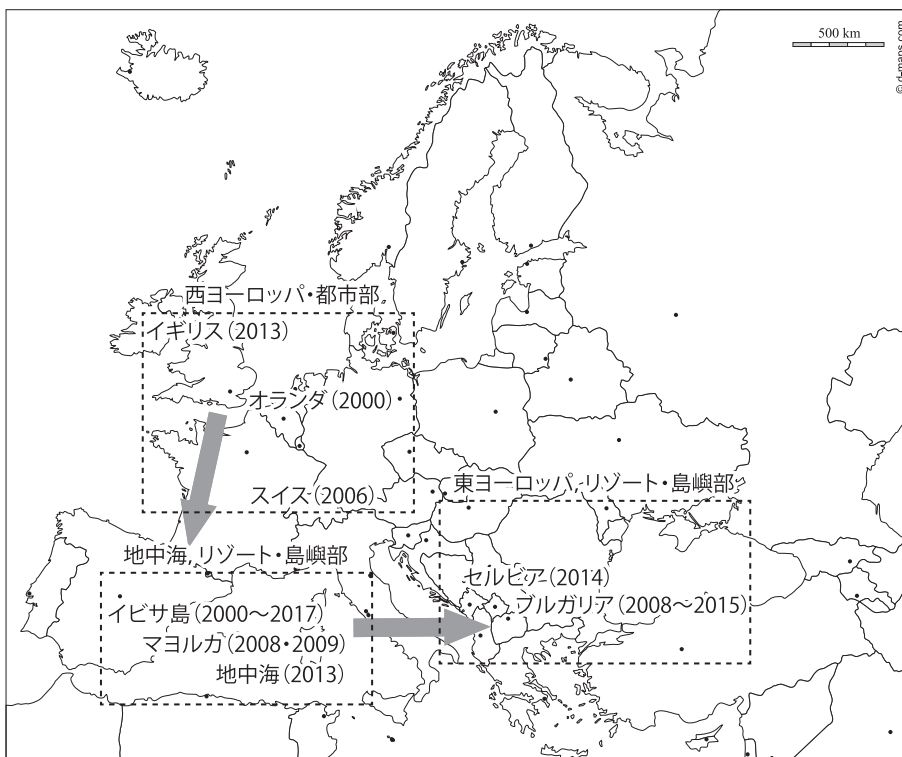


図3 先行研究のレビューにみるヨーロッパにおけるナイトライフ観光の発現地域背景の白地図には, フリー地図素材のd-maps. Comを用いた。

(先行研究のレビューにより作成)

都市では、大学生向け観光ツアーのパブクロールが確認されており (Hubbard, 2013), また、東ヨーロッパのリゾート地では、航空券手配と宿泊施設・パーティ関連のアクティビティー型パッケージ利用が一般的であるなど (Hesse et al. 2008), ヨーロッパ内部でも地域により多様な観光行動から成ることがわかる。パッケージ型ツアーが嗜好される場合の理由として、参加者の年齢が若い、また、東ヨーロッパ等の特定の地域における土地勘がない集団であり、したがって言語的障壁がある程度存在すること等が挙げられる。また、飲酒行動はとりわけパッケージ観光で強められる傾向もあり、パブクロールやパーティクルーズ、泡パーティ等の観光アクティビティを通して大量に消費されるという (Tutenges, 2013)。ただし、例えば日常生活 *ordinary* から離れる *departure* ことを目的とし、若年層が数日間自宅を離れパーティ旅行をする「ディパーティ *departies*」(Fjær and Tutenges, 2017) は、旅行者等々の業者を介在していないため個人観光としてみなすことができるが、観光行動としてみた場合には、学生という特定の年齢・社会的属性から成る「若者集団」特有の団体行動としての意味から、団体行動としても解釈できるように、各ケースにより観光行動の意味合いは異なる。また、これら観光行動は、国籍や宗教、社会階層、ジェンダーやセクシュアリティによっても異なるとされている (Mattila et al. 2001; Tutenges, 2013)。そのため、ナイトライフ観光に関する観光客層や観光行動を主要な考察対象とする場合には、観光アトラクションや観光行動の具体性、地域や事例に応じた検証が求められるであろう。

2. 日本におけるナイトライフ研究の可能性

こうした、海外のナイトライフ観光で取り上げられている観光資源や観光行動の具体性を踏まえ

て、日本におけるナイトライフ研究の可能性を考察する。そのために、ナイトライフ研究およびナイトライフ観光研究と接近するものを扱う国内の既存研究を展望する。

II章で既に述べた通り、海外におけるナイトライフ研究は、西ヨーロッパ都市における脱工業化と都市観光の重要性の増加に関するものが主体であるが、国内の研究においても同様の研究視点に根付くものが確認される。例えば、知識産業集積の立地因子を市区町村レベルデータのパス解析および事業所アンケート調査から明らかにした山村・後藤 (2013) は、「才能 (知識労働者) の地理的分布」よりも「アーバニティ」としての食・ナイトライフ・都市化経済が立地因子として強く働くこと、また、これらは「アーバニティ資本」として知識産業の立地を促していると結論付けている。また、大阪府中央区南船場が「ファッショナブルな都市細街路」へと変容した過程を扱った三田 (2014) は、ズーキン, S. によるニューヨーク (ローワーマンハッタン, SoHo) の事例や、ロイド, R. のシカゴ (ウィッカーパーク) に関する論文を引用しつつ、同地が木材・繊維問屋集積地から「洗練されたライフスタイル」を提供する場所へと変容した契機として、都市企業家による「ライブハウスやナイトクラブ」関連のイベント交流があった点に触れている。これらは、研究手法や研究分野こそ異なるものの、都市特有のアーバニティと創造性を関連付けるという意味において同一の方向性を提示しており、またそこにおけるナイトライフ資源へ言及した研究として多くの示唆を含む。

他方で、鈴木 (2013) も指摘するように、日本には「夜のツーリズム」に関して体系的に論じた研究は存在しない。しかし、海外の調査報告を含めると、地理学では、例えば根田 (2008) がある。これは、イギリスにおける全観光トリップの約

63%を占めるアーバンツーリズムの特徴を扱った研究であるが、特にノッティンガム市では、1990年代半ば以降レジャー施設の開業が相次いだ中心市街地において、パブ、バー、クラブ、バーといった「夕刻・夜間経済」を主体とするナイトライフ都市アメニティが、市街地の魅力創出に一定の役割を果たすと、ローカルプランにおいて認識されている点に触れている。この研究は海外を対象とした研究でこそあれ、ナイトライフ研究およびナイトライフ観光研究のいずれの視点も包括する。

また、複数の外国語言語と日本語の観光書における項目類の違いにおいて、ナイトライフがあることに言及した研究も散見された。例えば、スペインを訪れる日本人旅行者の観光行動空間を扱った吉原(2012)は、日本語ガイドブックに記載されている観光アトラクションと日本人の都市ごとの訪問者数との間に強い相関関係があることを示しているが、これによると、日本語ガイドブックでは自然資源やナイトライフに関する記載が、その他言語のガイドブックに比して少ないとされている。同様に、日本と英語圏の案内書における名所の空間的分布の相違を比較検討した鈴木・若林(2008)は、港区六本木界隈のナイトライフ観光資源¹¹⁾が、英語圏からの旅行者向け案内書に登場する頻度が高いことを指摘している。こうした言語別あるいは国・地域別の観光ガイドブックにおいて取り上げられている観光資源の違いは、それぞれの地域の観光に求めるものや、文化、ライフスタイルの差とも関係するものであろう。同時に、海外のナイトライフ研究で指摘されていた論点の一つである、各国の観光市場の成熟度とも比較し得るであろう。すなわち、「グローバル・ノース」(van Liempt, 2015)のような先進国では、ホスト・ゲスト双方における観光市場が成熟し、より個人の価値観に適合した観光形態へとシフトする可能性があるという見方であり、ナイトライ

フ観光はこの意味において重要な都市経済の役割を担う可能性がある。

また、ナイトライフ観光資源はポスト工業都市における観光産業の重要性の増加を背景に、市・州政府の観光政策や企業誘致政策等に代表されるような都市間・都市内の競争とも不可分の関係にある(Chatterton and Hollands, 2003; van Liempt et. al., 2015)。これは、西ヨーロッパのみならず、アジアでも顕在化しつつあり(II章の3)、例えばマカオ(中国)やシンガポールの例は、カジノ観光やMICE観光振興と大きく関わる部分である。日本では、目下2020年の東京オリンピック開催に向けて、国家戦略特区の設置等に代表される建造環境の改編だけでなく、他のグローバル都市の観光政策を意識した観光戦略の樹立を指向しており(市川, 2015)、それらメガ・イベントに際して東京が直面する変化は、都市・社会・経済・政治という様々な側面から重要な地理学的主題と成り得ることが最新の議論で成されている(大城・荒又, 2017)。日本は、アジア主要都市間の競争の加速を背景に、IR推進法に代表される統合型リゾート施設の開発、あるいはMICE観光振興といったポスト・オリンピック時代における新たな国家規模の観光事業が控えており、このなかでナイトライフ観光が更なる意味をもつ可能性は多分にある¹²⁾。実際に、風営法改正への取り組みと、2015年6月17日の改正および2016年6月23日の改正風営法の施行は、ナイトライフ観光の今後の成長可能性を十分に示唆するものである。

こうした状況を踏まえて、政策立案者あるいはそのステークホルダーの動向を窺うと、東京都(2017)によるナイトライフ観光の重要性の示唆や、新経済連盟¹³⁾によるナイトライフ観光への注目(新経済連盟, 2017)は、東京オリンピックというメガ・イベント前後における東京の観光の新しい可能性や問題点を提起する。

また、こうした競争はメガ・イベントのみならず、観光都市としての格付けを通してさらに強められていく。例として矢ヶ崎（2014）は、世界経済フォーラムやアメリカ・ニューヨーク市に拠点を置くブランドコンサルティング会社Future Brand社が提供する観光目的地のブランド指標を用いて、日本のインバウンド観光振興における課題を精査しているが、同研究によると、Future Brand社が2005年から提供を開始したCountry Brand Index（CBI）の観光分野の項目に、2011年より新たに、「金額に見合う価値、魅力、リゾート・宿泊施設、食事、買い物、ビーチ、ナイトライフ」の7項目が設置されたという（矢ヶ崎、2014）。このCBIにおいて、日本は2010年以降上位に位置していることから、矢ヶ崎（2014）は、ナイトライフが日本において今後発展可能性のある課題であることを示唆する（矢ヶ崎、2014: 80）。こうした格付けは、その信頼性を別として、都市における特定の経済部門との関わりを背景に、グローバル都市とされる特定の都市間の競争を熾烈化させる側面をもつ。この点に関して、ナイトライフがもしその一端を担う可能性があるのであれば、グローバル・ローカル双方の視点からみた具体的な都市事例に基づく研究が求められよう。

こうした研究可能性の一方で、ナイトライフあるいはナイトライフ観光のもつ否定的側面も看過できない点に再度触れておく。欧州のナイトライフ観光研究に代表されるように、ドラックユースや暴力性、アルコールに関連する問題、未成年への制限等は、夜間という時間帯の特性と大きく関わり、研究の深化と同時に配慮されるべき問題であろう。

また、ナイトライフ観光は、メガ・イベントを誘致できる程の経済・人口規模を抱える大都市に顕著である一方で、これら大都市と地方中小都市の格差を益々増大させる一面もある。この点に関

して、鈴木（2013）は、地方都市の夜間経済を取り巻く実情を、運転代行業の地域的差異に注目することで明らかにしている。そもそも夕刻以降の公共交通の利用が困難な地方都市では、夜間の移動手段は限定されており、そこにツーリズムの「隠れた次元」が存在するとした同研究は、大都市と地方都市という都市間の格差に根差す問題からナイトライフ観光の側面を描いている。また、これに関するものとして、栗原ほか（2015）は観光庁の訪日外国人消費動向調査を基に、「初訪日旅行者」と「訪日リピーター」の観光消費の違いを明らかにしているが、これによると「訪日リピーター」の期待度は、日本の歴史・伝統文化体験や生活文化体験、ナイトライフに対して減少し、他方で日本の四季や自然・景勝地観光への期待度は増加する傾向にあるともいわれている（栗原ほか、2015: 390-391）。すなわち、ナイトライフ観光が大都市に限定される側面を有するものの、それは持続性という観点から依然として不確かな部分もあり、他方で日本の四季折々の自然景勝地は、持続性という点においてリピーターを魅了する観光資源であり続ける可能性があるということである。大都市と地方都市、都市とその他の地域とのこれら「違い」は、夜間経済という視点から、より照射され得る問題かもしれない。またその際には、観光政策を方向付ける上で、それが長期的な観光資源と成り得るのかという問いも十分に検討する必要があることに触れておく。

ただし、現段階における日本国内の論文ではナイトライフが指し示す具体性として、「パブ・バー、クラブ、レストラン」（根田、2008）や「芸能の伝統」「都市部における一定の文化施設・繁華街等の集積」（矢ヶ崎、2014）を除き、明確に定義されてはおらず、その具体的観光資源も不明確である。また、矢ヶ崎（2014）の用いる「繁華街」は、既存研究の盛り場と意味が重なることか

ら、片仮名表記での「ナイトライフ」の定義に関する議論も含めて、今後広くナイトライフ観光の具体性に関する研究が求められよう。

IV おわりに

本稿ではナイトライフに関する先行研究を展望した。本稿で得られた知見は以下の通りである。

まず、Scopusによると、ナイトライフに関する研究は2000年代後半以降増加し、とくに2010年代の研究蓄積が著しい(Ⅱ)。ナイトライフ研究は夜間に関する地理学という研究視点からUrban Studiesにおいて特集号が発表されるなど、欧州諸都市においては非常に重要な研究課題の一つとなりつつあり、それらは夜間経済や先進諸国を意味するグローバル・ノースの消費行動と新形態として研究が進められつつある。他方、ナイトライフ観光はアジアのそれと欧米のそれとは意味が異なり、前者はより広義の夜間観光の特徴として、後者はより狭義のクラブやバーといった特定の施設や地域への観光行動としての特徴が読み取れた。しかし、東南アジアの都市部は、その観光開発の特性から欧米系のナイトライフ観光が題材として扱われており、近年では東アジアでもカジノ観光に付随する観光資源としてのナイトライフに注目が集まりつつある。アジアにおける都市間競争が観光において激化するなかで、今後は都市アメニティや具体的なナイトライフ観光資源に関する研究が求められる。

また、ナイトライフ観光の具体性に関して、とりわけ欧州では、音楽や飲酒と関連するナイトクラブが一般的な観光資源として認識され、それらの観光行動は若者が主体であることがわかった(Ⅲ)。ただし、既存研究で想定されている年齢層は10代から40代までと多様であり、こうした年齢に関する定義はその都度行うのが妥当であるといえる。また、ナイトライフ観光の地理的特徴を

ナイトライフ観光に関する先行研究からみると、2000年代以降、西ヨーロッパ都市部から地中海リゾート・島嶼部、東ヨーロッパのリゾート・島嶼部と段階的に推移してきていることもわかった。さらに、ナイトライフ観光行動としてみた場合、西ヨーロッパの都市部では個人客が一般的であるのに対し、西ヨーロッパの大学都市や東ヨーロッパのリゾート地域ではツアー客が主体であることなどから、土地勘がない場合や言語的障壁が高い場合には、ナイトライフ観光関連のツアーやアクティビティが利用・提供される場合もある。すなわち、ナイトライフ観光の具体的観光形態は、個人客だけではなく、国籍や宗教、社会階層、セクシュアリティおよびジェンダーにより可変的であることがわかった。

他方で、日本のナイトライフ研究は、知識産業の集積との関係性や創造性への寄与といった点で、欧州の視点に類似する研究が数件程度確認されたが、ナイトライフ観光研究は、地理学・観光学を問わずほぼ行われていない。東京の置かれている状況を鑑みると、プレ・オリンピックには風営法改正が行われ、ポスト・オリンピックにはMICE観光振興やIR推進法に基づく統合型リゾートの建設計画が国家規模の観光事業として実現に向け動き出しており、その背後にはアジア主要都市間や、グローバル・ノースの主要都市間の競争激化がある。こうしたなかで、ナイトライフ観光は24時間経済を指向するグローバル都市の飽くなき経済成長と相まって、都市行政や民間企業により注目されつつあることも必然の流れであろう(新経済連盟, 2017; 東京都, 2017)。この時に働く、グローバル・ローカル双方における政策の意図や、その背後にあるポリティックスを、地理学ならではの目線で冷静に見極めることは非常に重要な意味をもち得る。他方で、ナイトライフは主要都市と地方都市間の格差を強める側面ももち、

それらは夕刻以降の公共交通の有無といった夜間交通インフラの側面にも地域差として現出する。夜間経済やナイトライフの地域差に関しても、広い視点から研究が求められよう。

ただし、国内のナイトライフ観光研究では、この「ナイトライフ」の観光資源の具体性が明示されておらず、それに関する研究も行われていない。海外のナイトライフ観光研究が、ナイトクラブや飲酒を主体とする観光であるのに対し、東京におけるナイトライフ観光資源の具体性は何であるのか、また観光行動はどういったものであるのか、特定の地域や事例報告に基づく具体的検証が求められる。また、日中の都市観光行動と夜間の都市観光行動の違いという時間地理学的視点も、非常に有効な研究アプローチと成り得よう。

[付記]

本稿の一部は、日本地理学会2017年秋季学術大会(於、三重大学)「東京におけるナイトライフ研究の可能性」で発表した。なお、本研究は日本学術振興会研究奨励費(課題番号17J02079,平成29~31年度)「ドイツにおける文化創造的都市づくりと都市変容」(研究代表者:池田真利子)の一部を使用した。

注

- 1) **Time out**は1968年にロンドンで創刊されたシティガイド誌であり、世界108都市12言語で発信されている。タイムアウト東京は2009年に設立された株式会社であり、渋谷区広尾に所在する。メディア媒体はオンラインと雑誌双方が存在するが、日本語で発信されているのは前者のみであり、それ以外は英語、中国語が主体である。
- 2) **Scopus**はElsevier社が提供するサービスであり、世界5,000社以上の出版社が提供する21,000誌以上のジャーナルを含むという点において、後述の**Web of Science**よりもより広範囲な学術領域における検索が可能である。
- 3) 2017年7月8日現在で、ナイトライフ研究は計404件存在した。
- 4) ただし、本稿で扱うナイトライフ観光は、例えば日本人の日常的観光行動や日帰り観光行動としての側面も有しているが、これらは英語圏を含む多くの言語圏において観光行動として認識されていない可能性があることも、ここに懸念事項として記しておく。
- 5) 同論文におけるイベント観光の具体例として、フェスティバル、コンサート、トレードショー、コンベンション、スポーツイベントが挙げられている(Wong, 2011)。
- 6) **MICE**観光とは、**Meeting**(企業等の研修・セミナー等)、**Incentive Travel**(企業報奨・研修旅行や招待旅行等)、**Convention**(国際団体や学会が主催する国際会議等)、**Event**または**Exhibition**(文化・スポーツ等のイベント、展示会等)の頭文字をとった表現で、ビジネストラベルの一形態であるとされている(観光庁, 2017)。これに関する研究として、杉本・菊池(2016)等が挙げられる。
- 7) **IR**とは統合型リゾート(**Integrated Resort**)の略称を指し、カジノを併設する点において既存の観光と異なる。この**IR**を巡っては、様々な議論が成されているが、特に**VIP**観光客を取り込むためのアジア域内の都市間競争の激化を背景に(Li et. al. 2017)、日本ではオリンピック後の観光政策の主軸となる可能性も高いとの見方も存在する(佐々木・中條2016)。
- 8) この世代は1980~1990年代半ばに出生した世代とされており、高収入で消費文化を享受し、電子機器・デジタル環境に慣れた世代であるとの社会的認識がある。
- 9) 本稿では、ある国のインバウンド・アウトバウンド観光といった場合に、前者はある国へと外国人が訪れる観光を、後者はある国からみた外国への観光を指す。すなわち、観光研究全般で通年化している表現と同様の意味として用いる。
- 10) そのほか、ヨーロッパではないが、トルコのイスタンブール(Hayir-Kanat, 2016)や南アフリカ共和国の主要都市ケープタウン、ヨハネスブルク、ダーバン、プレトリアにおけるナイトライフ観光資源を扱ったPrayag(2007)も挙げられる。
- 11) 英語圏の案内書には「After dark」や「Nightlife」といったカテゴリーが設けられており、これが日本の案内書との違いであることにも触れられている。
- 12) なお、この点に関して佐々木・中條(2016)はメガ・イベントと**MICE**観光は先行の大規模な資本投資を要するのに対し、統合型リゾートのカジノはそれら投資の資本を回収する意味があるとしており、

これら複数の観光事業は相互関連性が高い。

- 13) 新経済連盟は、IT産業を中心とした新産業に係る政策や制度の整備に民間企業の立場から提言を行うために2012年に立ち上げられた経済連盟であり、2017年8月現在、491社が加盟する。

文 献

- 市川宏雄 (2015) : 『東京2025 ポスト五輪の都市戦略』東京経済新報社。
- 大城直樹・荒又美陽 (2017) : 都市表象と建造環境の解釈をめぐる展望と課題－アート・サブカルチャー・オリンピック。地理学評論, **90A**, 413-414。
- 観光庁 (2017) : MICEの開催・誘致の推進。http://www.mlit.go.jp/kankocho/shisaku/kokusai/mice.html [Cited2017/10/03]
- 栗原 剛・坂本将吾・泊 尚志 (2015) : 訪日リピーターの観光消費に関する基礎的研究。土木学会論文集D3, **71**(5), I_387-I_396。
- 佐々木一彰・中條辰哉 (2016) : 観光資源としてのカジノ (平成25年度～平成27年度科学研究費助成事業基盤研究(C) 研究成果報告書), 日本大学経済学部。
- 新経済連盟 (2017) : 観光立国実現に向けた追加提案。2017年5月25日。
- 杉本興運・菊池俊夫 (2016) : 東京におけるMICE誘致のための空間活用方策の現状と課題。2016年度日本地理学会春季学術大会発表要旨集, **89**, S406。
- 鈴木晃志郎 (2013) : ツーリズムの『隠れた次元』－「夜のツーリズム」と運転代行業に関する予備的考察－。日本観光研究学会全国大会学術論文集, **28**, 353-356。
- 鈴木晃志郎・若林芳樹 (2008) : 日本と英語圏の旅行案内所からみた東京の観光名所の空間分析。地学雑誌, **117**, 522-533。
- 東京都 (2017) : PRIME観光都市・東京－東京都観光産業振興実行プラン。東京都。
- 根田克彦 (2008) : イギリスにおける観光政策－ノッティンガム市の事例－。都市研究, **8**, 35-49。
- 三田知実 (2014) : 大阪市中央区南船場における問屋街からファッショナブルな都市細街路への変容過程。応用社会学研究, **56**, 123-140。
- 矢ヶ崎紀子 (2014) : 旅行・観光に関する評価指標にみる日本のインバウンド観光振興の課題に関する一考察。現代社会研究, **12**, 73-81。
- 山村 崇・後藤春彦 (2013) : 東京大都市圏における知識産業集積の形成メカニズム－市区町村レベルデータのパス解析および事業所アンケート調査より－。日本建築学会計画系論文集, **78**, 1523-1532。
- 吉原 遼 (2012) : スペインにおける日本人旅行者の観光行動空間。日本地理学会発表要旨集, **83**, 506。
- 吉見俊也 (2015) : オリンピックと東京文化資源区。季刊文化経済学会, **24**(1), 91, 1-2。
- 吉見俊也 (2016) : ポスト2020の東京ビジョン：21世紀の戊辰戦争は可能か。国際シンポジウム『都市と祝祭』, 芸術公社。
- Becherucci, M.E. and Seco Pon, J.P. (2014) : What is left behind when the lights go off? Comparing the abundance and composition of litter in urban areas with different intensity of nightlife use in Mar del Plata, Argentina. *Waste Management*, **34**, 1351-1355。
- Bellis, M.A. and Hughes, K. (2003) : Global nightlife: Recreational drug use and harm minimisation. *Addictions*, **15**(2), 289-305。
- Bellis, M.A., Hale, G., Bennett, A., Chaudry, M. and Kilfoyle, M. (2000) : Ibiza uncovered: Changes in substance use and sexual behaviour amongst young people visiting an international night-life resort. *International Journal of Drug Policy*, **11**, 235-244。
- Bellis, M.A., Hughes, K., Bennett, A. and Thomson R. (2003) : The role of an international nightlife resort in the proliferation of recreational drugs. *Addiction*, **98**, 1713-1721。
- Bellis, M.A., Hughes, K., Thomson, R. and Bennett, A. (2004) : Sexual behaviour of young people in international tourist resorts. *Sexually Transmitted Infections*, **80**, 43-47。
- Bellis, M.A., Hughes, K.E., Dillon, P., Copeland, J. and Gates, P. (2007) : Effects of backpacking holidays in Australia on alcohol, tobacco and drug use of UK residents. *BMC Public Health*, **7**(1), 1-10。
- Bellis, M.A., Hughes, K., Calafat, A., Juan, M. and Schnitzer, S. (2009) : Relative Contributions of Holiday Location and Nationality to Changes in Recreational Drug Taking Behaviour: A Natural Experiment in the Balearic Islands. *European Addiction Research*, **15**, 78-86。
- Bianchini, F. (1995) : Night Cultures, Night Economies. *Planning Practice & Research*, **10**, 121-126。
- Cabasset, C. (1991) : Cultural and mass tourism in Bali, Indonesia. *Cahiers d'Outre-Mer*, **48**(191), 319-346。
- Calafat, A., Hughes, K., Blay, N., Bellis, M.A., Mendes, F., Juan, M., Lazarov, P., Cibin, B. and Duch, M.A. (2013a) : Sexual Harassment among Young Tourists Visiting Mediterranean Resorts. *Archives of Sexual Behavior*, **42**, 603-613。
- Calafat, A., Bellis, M.A., Fernández del Rio, E., Juan, M.,

- Hughes, K., Morleo, M., Becoña, E., Duch, M., Stamos, A., Mendes, F. (2013b) : Nightlife, verbal and physical violence among young European holidaymakers: What are the triggers? *Public Health*, **127**, 908-915.
- Chatterton, P and Hollands, R. (2003) : Urban Nightscapes: *Youth Cultures, Pleasure Spaces and Corporate Power*. Psychology Press.
- Cherpitel, C.J., Ye, Y., Zemore, S.E., Bond, J. and Borges, G. (2015) : The effect of cross-border mobility on alcohol and drug use among Mexican-American residents living at the U.S.-Mexico border. *Addictive Behaviors*, **50**, 28-33.
- Crary, J. (2013) : *24/7: Late Capitalism and the Ends of Sleep*. London & NY: Verso.
- d-maps. Com: <http://d-maps.com/index.php?lang=en> [Cited2017/10/03]
- Dwivedi, M., Yadav, A. and Patel, V.R. (2009) : The online destination image of Goa. *Worldwide Hospitality and Tourism Themes*, **1**, 25-39.
- Esteban-Talaya, A., Lorenzo-Romero, C. and Alarcón-Del-Amo, M. (2012) : Segmentation of tourists and day-trippers in Castilla-La Mancha (Spain) : Main differences and similarities. In: *Research Studies on Tourism and Environment*. Mondejar-Jimenez, J., Ferrari, G. and Vargas-Vargas, M, eds, 69-87. Nova Science Publishers.
- Fjær, E.G. and Tutenges, S. (2017) : Departies: conceptualizing extended youth parties. *Journal of Youth Studies*, **20**, 200-215.
- Hallab, Z., Price, C. and Fournier, H. (2006) : Students' travel motivations. *Tourism Analysis*, **11**, 137-142.
- Hayir-Kanat, M. (2016) : The Gentrification Process in the Historic Eminonu Peninsula in Istanbul. *Anthropologist*, **24**(3), 711-723.
- Henkel, R., Henkel, P., Agrusa, W., Agrusa, J. and Tanner, J. (2006) : Thailand as a Tourist Destination: Perceptions of International Visitors and Thai Residents. *Asia Pacific Journal of Tourism Research*, **11**, 269-287.
- Hesse, M. and Tutenges, S. (2011) : Young tourists visiting strip clubs and paying for sex. *Tourism Management*, **32**, 869-874.
- Hesse, M., Tutenges, S., Pedersen, M.U. and Kofoed, P.B. (2012) : An exploratory prospective study of young people's drinking during a holiday. *Nordic Studies on Alcohol and Drugs*, **29**, 485-496.
- Hobbs, J.D., Pattalung, P.N. and Chandler, R.C. (2011) : Advertising Phuket's Nightlife on the Internet: A Case Study of Double Binds and Hegemonic Masculinity in Sex Tourism. *Sojourn*, **26**, 80-104.
- Hritz, N.M., Sidman, C.L. and D'Abundo, M. (2014) : Segmenting the College Educated Generation Y Health and Wellness Traveler. *Journal of Travel and Tourism Marketing*, **31**, 132-145.
- Hubbard, P. (2013) : Carnage! Coming to a town near you? Nightlife, uncivilised behaviour and the carnivalesque body. *Leisure Studies*, **32**, 265-282.
- Hughes, K., Bellis, M.A., Calafat, A., Juan, M., Schnitzer, S. and Anderson, Z. (2008) : Predictors of violence in young tourists: A comparative study of British, German and Spanish holidaymakers. *European Journal of Public Health*, **18**(6), 569-574.
- Joksimović, M., Golić, R., Vujadinović, S., Šabić, D., Jovanović-Popović, D. and Barnfield, G. (2014) : Restoring tourist flows and regenerating city's image: the case of Belgrade. *Current Issues in Tourism*, **17**(3), 220-233.
- Kamenidou, I.C., Mamalis, S.A., Kokkinis, G. and Geranis, C. (2013) : Image components of nightlife-clubbing destinations. *Tourismos*, **8**(3), 99-111.
- Kelly, D., Hughes, K. and Bellis, M.A. (2014) : Work Hard, Party Harder: Drug Use and Sexual Behaviour in Young British Casual Workers in Ibiza, Spain. *International Journal of Environmental Research and Public Health*, **11**, 10051-10061.
- Kong, L. and Sinha, V. eds. (2015) : Food, Foodways and Foodscapes: *Culture, Community and Consumption in Post-Colonial Singapore*. World Scientific.
- Kuo, C.T., Chung, M.L. and Kuo, F.C. (2012) : To Explore Taiwanese Night Markets Culture and Tourism Experience and Behaviour. *Procedia - Social and Behavioral Sciences*, **40**, 435-440.
- Li, J., Kim, W.G. and Wong, I.A. (2017) : Does destination perception differ based on traveler type? A case of the world gambling capital: Macau. *Tourism Planning and Development*, **14**(1), 15-30.
- Lin, Z., He, G. and Vlachos, L.P. (2015) : Britain in bloom? A study into Chinese tourists' experience. *EuroMed Journal of Business*, **10**, 297-310.
- Litvin, S.W. and Wofford, E.B. (2017) : Charleston's newfound "entertainment zone": should we be concerned? *Current Issues in Tourism*, **20**(3), 233-237.
- Mattila, A., Apostolopoulos, Y., Sonmez, S., Yu, L. and Sasidharan, V. (2001) : The impact of gender and

- religion on college students' spring break behaviour. *Journal of Travel Research*, 40, 193–200.
- McCartney, G. (2008) : Does one culture all think the same? An Investigation of destination image perceptions from several origins. *Tourism Review*, 63 (4), 13-26.
- Park, S.H., Lee, C. and Miller, J.C. (2015) : A Comparative Study of the Motivations, Activities, Overall Satisfaction, and Post-Trip Behaviors of International Tourists in Macau: Mainland Chinese, Hongkongese, Taiwanese, and Westerners. *Asia Pacific Journal of Tourism Research*, 20(10), 1174-1193.
- Prayag, G. (2007) : Positioning the city product as an international tourist destination: Evidence from South Africa. *Tourism*, 55(2), 139-155.
- Presdee, M. (2002) : From carnival to the carnival of crime (PDF). <https://blogs.kent.ac.uk/culturalcriminology/files/2011/03/presdee-carnival.pdf> [Cited 2017/7/24]
- Rawding, C. (2000) : Tourism in Amsterdam: Marketing and Reality. *Geography*, 85: 167-172.
- Robinson, F. ed. (1988) : *Post-industrial Tyneside: an economic and social survey of Tyneside in the 1980s*. Newcastle Libraries & Information Service.
- Ryu, K., Bordelon, B.M. and Pearlman, D.M. (2013) : Destination-Image Recovery Process and Visit Intentions: Lessons Learned from Hurricane Katrina. *Journal of Hospitality Marketing and Management*, 22(2), 183-203.
- Serra-Cantalops, A. and Ramon-Cardona, J. (2017) : Host community resignation to nightclub tourism. *Current Issues in Tourism*, 20(6), 566-579.
- Sönmez, S., Apostolopoulos, Y., Theocharous, A. and Massengale, K. (2013) : Bar crawls, foam parties, and clubbing networks: Mapping the risk environment of a Mediterranean nightlife resort. *Tourism Management Perspectives*, 8, 49-59.
- Tadié, J. and Permanadeli, R. (2015) : Night and the city: Clubs, brothels and politics in Jakarta. *Urban Studies*, 52, 471-485.
- Tajeddini K., Ratten V. and Denisa M. (2017) : Female tourism entrepreneurs in Bali, Indonesia. *Journal of Hospitality and Tourism Management*, 31, 52-58.
- Transport for London: The Night Tube. <https://tfl.gov.uk/campaign/tube-improvements/what-we-are-doing/night-tube> [Cited 2017/10/05]
- Transport for London (2014) : 'Historic' new Night Tube service. <https://tfl.gov.uk/info-for/media/press-releases/2014/september/-historic-new-night-tube-service> [Cited 2017/10/05]
- Tutenges, S. (2009) : Safety problems among heavy-drinking youth at a Bulgarian nightlife resort. *International Journal of Drug Policy*, 20, 444-446.
- Tutenges, S. (2012) : Nightlife tourism: A mixed methods study of young tourists at an international nightlife resort. *Tourist Studies*, 12(2), 131-150.
- Tutenges, S. (2013) : Stirring up effervescence: an ethnographic study of youth at a nightlife resort. *Leisure Studies*, 32, 233-248.
- Tutenges, S. (2015) : Pub crawls at a Bulgarian nightlife resort: A case study using crowd theory. *Tourist Studies*, 15(3), 283-299.
- Tutenges, S. and Hesse, M. (2008) : Patterns of binge drinking at an international nightlife resort. *Alcohol and Alcoholism*, 43, 595-599.
- Tutenges, S., Jæger, M.M. and Hesse, M. (2012) : The Influence of Guides on Alcohol Consumption among Young Tourists at a Nightlife Resort. *American Journal on Addictions*, 21, 72-76.
- van Liempt, I., van Aalst, I. and Schwanen, T. (2015) : Introduction: Geographies of the urban night. *Urban Studies*, 52, 407-421.
- Volterra (2014) : *Impact of the Night Tube on London's Night-Time Economy*. Volterra Partners.
- Wong, I.A. (2011) : Using Destination Attributes to Promote Event Travel: The Case of Macau. *Journal of Convention and Event Tourism*, 12(4), 241-252.
- Yeo, S.J., Hee, L. and Heng, C.K. (2012) : Urban informality and everyday (night) life: a field study in Singapore. *International Development Planning Review*, 34, 369-390.
- Yin, P. (2011) : Nighttime tourism activities of domestic tourists in Beijing: an exploratory study. *Journal of System and Management Sciences*, 1(6), 38-47.

A Review of Nightlife Literature and Suggestions for Future Research in Japan

IKEDA Mariko

JSPS Research Fellow, Tokyo Gakugei University

Keywords: Nightlife, Tourism, Nightclub, Europe